ボールゲームにおける児童の変容のとらえ方についての研究

―ボールゲームの指導や評価に対する学生と教師の実態調査から―

深町明夫・中林忠輔

How to Evoluate Children's Changing Performance in Games Played With Balls

Akio Fukamachi, Tadao Nakabayashi

I はじめに

文部省小学校指導書体育編によれば「評価は，学習指導によって，児童がどのように変化したかを目標に照らして明らかにし指導計画や指導法の改善に資するとともに，児童自身が自己評価や相互評価によって自己の特性や進歩の程度を知り，自覚をもって学習活動に取り組むことができるようにすることを目指している.」評価の観点については「更に幾つかの具体的な項目に細分化し，それぞれの項目がどのような場で，どのような姿でとらえられるかを知るとともに，評価の項目ごとに技能や態度についての評定尺度をもって評価することが大切である.」と述べている.　体育における児童の変容については体力，技能，態度等を具体的な項目に細分化し評定尺度等を作成し行なうことが望まれているが小学校ではひとりの教師が全教科を担当するので，あまり複雑な方法や専門的であると実際的でないので，簡単で手軽にできる方法が望まれている.

評価という立場から考えて，指導書はより客観的にとらえるようにと解釈できるが現実には多くの場面において主観的に評価せざるを得ない．技能面だけに限定して考えても陸上運動，水泳のように記録によって表われるもの，器械運動のように「できる」「できない」といったように表われて客観的に見れるもの他方，表現運動やボール運動のように主観にたよらなくてはいけないものもある．ゲームにおける児童の変容を見ようとするときは後者の主観にゆだねられる傾向が強いと思われる．主観にたよらざるを得ないとしても評価の観点により客観性をもたせ，各々に基準を設ける手だてはたえまなく追求する必要があると考えられる。

本研究はボール運動のゲームで個人の変容をどのような観点からとらえて，評価の際に役立てるのがよいかを知るもので、現職教諭と本学教育学部初等課程３年生を対象にボール運動を指導する際もしくは将来指導する場合にどのような意識をもっているのかを質問紙法によって調査することによって実態を把握し，現職教諭と学生の考え方の比較をすることによって指導時の評価についての参考資料を得るものである。

II 研究の方法

1　対象

東京都小学校現職教諭（以下教員と略す）

文教大学教育学部初等教育課程　3年生（以下学生と略す）

2　調査期間

昭和57年3月～7月

3　調査方法

アンケート方式　選択・諾否等

教員75名　（男子34，女子41）

学生139名　（男子50，女子89）

回収率　教員35.5％　学生100％

4　調査内容

1）　基礎項目

(1)　性別，教職経験年数（教員のみ），大学での専攻科目，運動クラブ所属経験の有無等

(2)　他教科に比べての体育指導の難易，他領域に比べてのボール運動指導の難易，ボール運動の技術やゲーム指導の難易，各ボール運動教材指導の難易等

2）　ボール遊び，ボール運動に於ける指導や評価の実態調査

ゲームに於ける児童の変容のとらえ方を調査するにあたり，項目を教科の目標に関するもの，学習指導に関するもの，個人の変化過程に関するもの，運動内容や態度の内容に関するものとした．さらに各項目ごとに評価の観点を細分化しその難易について調査した．各項目の観点は次のようである．

(1)　目標に関する項目

体力，運動技能，社会的態度，個人的態度，健康安全への関心，集団行動での態度，練習方法・ルールの理解に分類し，重要と思われるものを順に3項目選択する．

(2)　学習指導に関する項目

発育段階，個人差，男女差，技術的なねらい，努力度，上達度，社会的態度，個人的態度，グループの成績に分類設定し，どのような時期や方法で評価するかを選択する．また評価する際に困難と思われる観点を，運動量，ゲーム中の個人技能，集団での個人技能，集団全体の成果の反映，ゲームへの参加度・貢献度，勝敗を素直に認める態度，約束を守る態度に分類し，諾否を求める．

(3)　学習者の変化過程に関する項目

8タイプの学習曲線（図表1参照）を設定し，どのような変化過程をとる児童が評価しやすいかを選択する．

(4)　運動内容と態度の内容に関する項目

指導書の運動，技能，態度の内容から表5に掲げたような20項目を設定し，児童の変容のとらえやすさについて選択回答を求める．

5　結果の処理

教員，学生それぞれ性別に回答の集計を行ない，頻数についてパーセンテージを算出した．なお順位で回答するものは得点化してから集計した．教員，学生の比較においてはx^2-検定を用いた．

Ⅲ　結果と考察

1　体育やボール運動指導に対する意識について

Ⅱ－4－1)で述べたような基礎的調査項目によって，本研究対象者の実態をまず明らかにしたい．教員の教職経験年数は4年以下26名，5～9年21名，10～19年19名，20年以上9名であり，年令は20才代，30才代の教員が多かった．運動部経験は教員の有45名，無28名（無回答2）に対し，学生は性差が多少ありながらも　有45名，無93名で　本調査に回答した教員に運動クラブ経験者が多く運動や体育への関心がやや高いと思われ，その点を考慮する必要があろう．指導に対する難易については，指導がしやすいかを，はい，ふつう，いいえ，解らないのいづれかで回答を得たものである．その結果については表1を参照されたい．

表1　体育やボール運動指導に対する意識

	教員				学生			
	は　い	ふつう	いいえ	不　明	は　い	ふつう	いいえ	不　明
①体育は他の教科に比べて指導しやすいですか	32 42.7	27 36.0	13 17.3	3 4.0	35 25.2	50 36.0	42 30.2	12 8.6
②ボール運動は他の領域と比べて指導しやすいですか	44 58.7	26 34.7	5 6.7	0 0	72 51.8	46 33.1	17 12.2	4 2.9
③ボール運動における技術指導は指導しやすいですか	27 36.0	36 48.0	11 14.7	1 1.3	36 25.9	45 32.4	54 38.8	4 2.9
④ボール運動におけるゲーム指導は指導しやすいですか	30 40.0	38 50.7	5 6.7	2 2.7	71 51.1	47 33.8	19 13.7	2 1.4
⑤ボール遊びは指導しやすいですか	44 58.7	26 34.7	4 5.3	1 1.3	87 62.6	42 30.2	8 5.8	2 1.4
⑥ドッジボールは　〃	51 68.0	21 28.0	2 2.7	1 1.3	94 67.6	38 27.3	5 3.6	2 1.4
⑦ポートボールは　〃	32 42.7	23 30.7	6 8.0	14 18.7	45 32.4	80 57.6	11 7.9	3 2.2
⑧ラインサッカーは　〃	13 17.3	41 54.7	14 18.7	7 9.3	25 18.0	59 42.4	41 29.5	14 10.1
⑨バスケットボールは　〃	16 21.3	30 40.0	11 14.7	18 24.0	32 23.0	61 43.9	43 30.9	3 2.2
⑩サッカーは　〃	13 14.7	37 49.3	13 17.3	12 16.0	19 13.7	41 29.5	70 50.4	9 6.5

（数字は上段人数，下段％を示す）

体育は他教科に比べて指導しやすいかについては，教員は，はい，ふつうの順に多く8割を占めるが，学生は，ふつう，いいえの順に多く，教員に比較して体育が指導しやすい教科と考える学生が少ないことが解る．

他領域に比べてボール運動は教員，学生共に半数以上がしやすいと回答しているものの，技術指導は，教員はふつう，はい，学生はいいえ，ふつうの順に回答数が多く，学生がやや不安傾向にある．ゲーム指導は教員のふつう，はいの順に多いのに対し，学生ははい，ふつうと学生にゲームなら指導できるのではないかという意識が高く，経験の有無による指導内容に対する難易意識が異なると思われる．

ボール運動の各内容に対しては，ボール遊びやドッジボールは双方共指導しやすいと答えており，高度な技術が伴わないことや一斉指導がしやすい内容と思われるのでうなづける結果である．ポートボールはしやすい，ふつうが共に多く教員にその傾向が著しい．バスケットボールは　教員がふつう，解らないはいの順に対し，学生はふつう，いいえ，はいと回答が異なる．教員は高学年の経験が無く解らないと答えている者もあるが，学生の3割は指導しにくい教材と考えており，これは個人の技能との関連が推察される．この傾向はラインサッカー，サッカーに顕著であり教員の約半数がふつうと答えているのに対し，サッカーでは半数の学生がしにくいと答えている．これは文教大学教育学部紀要第15集でのレポート分析結果と酷似するもので，個人技能の未熟さやルールや用語の不理解によるものと思われ，特に女子にその傾向が強いのも同様の裏付けとなろう．

体育やボール運動領域が指導しにくいとする教員はさ程多くなく，指導を通しての経験や自信によるもので，児童の反応を常にダイレクトに受け止められる者の強みでもあり，その点が指導経験のない学生と大きく異なる．学生は自己体験や技術程度などによる判断であり，自分が上手に出きなかったり，知識が乏しかったりする不安が本調査にも表われていると思われる．

2　教科目標の評価

教科目標に関しては表2のように項目を分類し，評価の観点として重要と思われる項目をパーセンテージであらわした．教員については全体的に見るとb)運動技能26.7%，f)集団行動での態度24.0%，g)練習方法・ルールの理解19.8%と他の項目より顕著に高い率を示していた．反対にe)健康・安全への関心，d)個人的態度，a)体力は低い率を示している．最も重要と思われる項目だけについて見るとb)，f)であった．

表2　教科目標の評価

重要と思われる順位	教員 75人								学生 139人							
	1		2		3		全体		1		2		3		全体	
a)体力	11	14.7	3	4.0	3	4.0	17	7.8	15	10.8	4	2.9	6	4.3	25	6.1
b)運動技能	31	41.3	10	13.3	17	22.7	58	26.7	61	43.9	24	17.3	19	13.7	104	25.2
c)社会的態度	3	4.0	14	18.7	3	4.0	20	9.2	16	11.5	20	14.4	15	10.8	51	12.4
d)個人的態度	3	40	6	8.0	6	8.0	15	6.9	4	2.9	13	9.4	4	2.9	21	5.1
e)健康安全への関心	3	4.0	3	4.0	6	8.0	12	5.5	4	2.9	8	5.8	9	6.5	21	5.1
f)集団行動での態度	15	20.0	22	29.3	15	20.0	52	24.0	30	21.6	46	33.1	40	28.8	116	28.2
g)練習方法，ルールの理解	7	9.3	14	18.7	22	29.3	43	19.8	9	6.5	19	13.7	46	33.1	74	18.0

（重回答）
（数字は左側人数，右側%を示す）

児童を評価する時，運動技能と集団の中での個人の態度に注目しているとともに，運動技能に深い関心をもっていることはゲームの中での運動技能がゲームの際に考慮しなければならない項目であると考えられる．近年業間体育で体力づくりが取り入れられている現状から見ても本調査の結果では体力に関心が少ないことがうかがえる．

学生においては，全体的に見るとf)，b)，g)と上位を占めていた．反対にd)，e)，a)について低い関心度が示された．最も重要と思われる項目だけについて見るとb)，f)であった．

児童を評価する時，集団の中での個人の態度と運動技能が顕著に多い傾向が見られたが運動技能に最も重要と思うと答えた者が，顕著に多いのはゲームにおいても，よりよいゲームを遂行するには技能が伴っていなければならないと考えている学生が多くいることを示している．また，ボール運動においての技術指導は指導しやすいと思いますかとの問に対して「難しい」の割合が多く見られ，技術指導は難しいが，評価の観点としては運動技能が評価しやすいと答えている者が多く，運動技能を客観的，主観的にでも適確にとらえたいという傾向がうかがえる．

3　学習指導過程の評価

学習指導過程では個人的に関すること，集団の中での個人に関することに分けて調査した．個人的に関する項目は表3のように分類し，それぞれについて評価の場面について見たものである．

教員については，「授業中の観察で考慮する」ではe)努力度，h)個人的態度，g)社会的態度，f)上達度の項が高い率を示した．「何らかの方法で考慮する」についてはc)男女差に多く見られたが他の項目は高い率でないにしろ授業中の観察で考慮している．「できるだけ考慮するがうまくいかない」については，i)グループの成績，c)男女差の項が高い率を示している．i)グループの成績で「授業中の観察で考慮する」と「特に考慮しない」の率が同じなのはゲームのとらえ方に考え方の違いがあることに原因しているものと考えられ

る．ゲームの中で個人を評価する時，努力とか個人の態度の向上といった指導過程での変化でとらえる傾向が見られる．

表3　学習指導過程の評価（個人に関するすること）

	教員								学生							
	ア		イ		ウ		エ		ア		イ		ウ		エ	
a)発育段階	28	40.0	17	24.3	11	15.7	14	20.0	37	27.0	57	41.3	28	20.3	16	7.2
b)個人差	32	44.4	19	26.4	18	25.0	3	4.2	61	44.2	47	34.0	25	18.1	5	3.6
c)男女差	21	29.6	26	36.6	7	9.9	17	23.9	30	21.9	65	47.4	12	8.8	30	21.9
d)技術的なねらい	36	52.2	22	31.9	7	10.1	4	5.8	66	44.6	44	29.7	17	11.5	21	14.2
e)努力度	50	69.4	17	23.6	2	2.8	3	4.2	103	74.6	24	13.4	10	7.2	1	0.7
f)上達度	45	62.5	21	29.2	4	5.5	2	2.8	101	73.3	30	21.9	3	2.2	3	2.2
g)社会的態度	48	66.7	17	23.6	5	6.9	2	2.8	83	60.1	32	23.2	20	14.5	3	2.2
h)個人的態度	54	75.0	12	16.7	3	4.2	3	4.2	91	9.4	31	22.5	14	10.1	2	1.4
i)グループの成績	26	35.6	16	21.9	6	8.2	25	34.2	52	37.7	39	28.3	23	16.7	24	17.4

ア　授業中の観察で考慮する　　イ　何らかの方法で考慮する
ウ　できるだけ考慮するがうまくいかない　　エ　特に考慮していない
（数字は左側人数，右側％を示す）

学生についてはe)，f)，h)，g)項で「授業中の観察で考慮すると思う」と答えた者が顕著に多く見られた．d)技術的なねらいとの一致，b)個人差，i)項に関しては，「授業中の観察で考慮すると思う」と答えた者が一番多かったが，他の答えとそう顕著な差は見られない．またc)，a)発育段階については「何らかの方法で考慮すると思う」と答えた者が一番多く見られた．評価の際「できるだけ考慮するがうまくいかないと思う」にはa)，b)，i)，g)項に見られた．c)，i)，d)に「特に考慮しないと思う」と答えた者が見られた．ゲームの中で個人を評価する時，努力度，上達度といった過程でとらえる傾向が強く見られ，発育段階，個人差，男女差といった生まれつきの要素が基になっている項目にはあまり関心を示していない傾向が見られる．グループの成績は個人を評価する時の位置づけにおいてまだ不確定要素の多いところだけに回答がこのようになったものと思われる．

集団の中での個人に関する項目は表4のように分類し，それぞれについて評価の際の困

表4　学習指導過程の評価(集団の中での個人に関すること)

	教員				学生			
	はい		いいえ		はい		いいえ	
a)運動量	31人	43.7%	40人	56.3%	66人	48.9%	69人	51.1%
b)ゲーム中の個人技能	30	39.5	46	60.5	64	47.5	71	52.5
c)集団の中で発揮される個人技能	29	40.3	43	59.7	72	53.3	63	46.7
d)集団全体の成果をどう反映させる	50	69.4	22	30.6	106	77.9	30	22.1
e)ゲームへの参加度・貢献度	26	35.6	47	64.4	56	41.8	78	58.2
f)勝敗を素直に認めさせる態度	30	41.1	43	58.9	45	33.1	91	66.9
g)約束を守らせる態度	29	34.9	54	65.1	47	34.8	88	65.2

（はい　評価する時困る
いいえ　評価する時困らない）

難度を見たものである．

教員についてはd)集団全体の成果をどう反映させるかに評価の困難さをあげる者が顕著に多く見られた．全体として各項目とも評価の際の困難さは見られなく，ただ男子教員と女子教員との比較において，e)ゲームへの参加度・貢献度が男子「はい」21.2%，「いいえ」78.8%で女子「はい」52.5%，「いいえ」47.5%と見られ，また，b)ゲーム中の個人技能，男子「はい」26.5%，「いいえ」73.5%，女子「はい」51.2%，「いいえ」48.8%と見られることからe)，b)項が逆になっており男子教員に困難さはないと答えている者が顕著に多く見られ，ゲームを観察するときの留意点に相違があるのではないかと推察される．

学生については前述した「グループの成績を個人の評価にどう生かすか」で回答のばらつきが見られたと同様にd)項に困難さをあげている者が顕著に見られた．次に，c)集団の中で発揮される個人技能に困難さをあげている者が多く見られたが顕著な差は見られない．f)勝敗を素直に認めさせる態度，g)約束を守らせる態度に関しては困難さは見られなかった．全体的に困難度に差が見られないことは，集団の中にいる個人を評価する具体的事例がないことが原因しているものと考えられる．

4　学習者の変化過程からみた評価の難易について

学習者の指導による変化過程を学習曲線として，上昇傾向4，停滞1，下降傾向3計8つのタイプに分類したのが図表1である．この中から評価しやすいタイプ，しにくいタイプそれぞれ2つを選択回答するものであるがこの評価対象については，技能や態度などと限定せずに一般的かつ観念的なものとした．

図表1　学習者の変化過程

	記録変化のタイプ	備考	教員 しやすい	教員 しにくい	学生 しやすい	学生 しにくい
上昇	(A)	努力の過程にしたがって順調に記録が上昇していく	57人 46.7%	0人 0%	128人 47.9%	1人 0.4%
上昇	(B)	記録が不安定で，常に上下しながら相対的に向上していく	20 16.4	14 11.8	25 9.4	33 12.5
上昇	(C)	前半順調に上昇し，平原状態になり，記録が固定化する	11 9.0	14 11.8	18 6.7	19 7.2
上昇	(D)	いったん上昇した記録がやや下降するが，相対的には記録がのびている	3 2.5	19 16.0	9 3.4	36 13.7
停滞	(E)	最初から全く記録に変化なし	13 10.7	19 16.0	22 8.2	55 20.9
下降	(F)	最初よいだけで記録は低下する	14 11.5	14 11.8	53 19.9	26 9.9
下降	(G)	記録が上下しながら相対的に下降する	1 0.8	23 19.3	1 0.4	53 20.2
下降	(H)	いったん下降し，なれに従って再び記録が上昇する	3 2.5	16 13.4	11 4.1	40 15.2

（重回答）

教員の評価しやすいタイプは A,B,F,C,の順に多く，特にAタイプはほとんどの教員が選択した．しにくいタイプは，G，E，D，Hの順に多く，B，C，Fらの選択者もかなりおりちらばりが大きかった．各タイプの選択数でしやすいをプラス，しにくいをマイナスとし加減すると，A，Bがプラス，Fが0他はマイナスとなり，A，Bタイプ以外は評価しにくいとの考えが多いことになる．上昇傾向の中でも比較的安定しているもの以外は評価しにくいことになり，一般的にはAの逆過程のFなども評価しやすいのではないかとの予想と相違した．教員は常に児童の向上を考えて指導する立場にあり，指導しても進歩がなかったり，下降する者に対しては余り考えられない事でもあって困惑するタイプと見るのが妥当と思われる．

学生の評価しやすいタイプは教員同様ほとんどがまずAを選択し，順にF，Bと続き，しにくいタイプはE，G，D，Bなどに回答が分かれた．選択数の＋－から判断すると，A，Fがしやすく G，E，D，Hに順にしにくいという結果になる．学生は変化のはっきりした傾向において評価しやすく，変化が複雑や少ないタイプは評価しにくいとしており，これは通常考えられていることと一致してると言えよう．

学習者の変化過程については，教員は児童が最終的には向上すればとの期待を第一に考えて評価しているのに対し，学生は変化のはっきり解るタイプを評価しやすいとしており，ここに実践している者とまだ理論だけの者とに相違が認められた．

5　運動内容・態度内容

表5　運動内容・態度内容

	教員			学生		
	とらえやすい	ふつう	とらえにくい	とらえやすい	ふつう	とらえにくい
a）手で扱われる「フォームなどのボールコントロール」	41 56.2	30 41.1	2 2.7	80 58.0	45 32.6	13 9.4
b）手で扱われる「動きを伴ったボールコントロール」	38 52.1	29 39.7	6 8.2	50 36.2	73 52.8	15 10.9
c）手で扱われる「対人時におけるボールコントロール」	35 47.9	21 28.8	17 23.3	48 34.8	62 45.0	28 20.2
d）足で扱われる「フォームなどのボールコントロール」	39 53.4	26 35.6	8 11.0	65 47.1	51 37.0	22 15.9
e）足で扱われる「動きを伴ったボールコントロール」	35 47.9	23 31.5	15 20.6	38 27.5	70 51.0	30 21.7
f）足で扱われる「対人時におけるボールコントロール」	31 42.5	20 27.4	22 30.1	37 26.8	57 41.3	44 31.9
g）集団の中でのボールコントロール	16 21.9	42 57.5	15 20.5	34 24.6	57 41.3	47 34.1
h）集団の中でのボディコントロール	13 20.3	26 40.6	25 39.0	21 7.2	59 42.8	58 42.0
i）各ポジションの動きの理解	14 19.2	30 41.1	29 39.7	36 25.9	41 29.5	62 44.6
j）ゲームの仕組みやルールの理解	29 42.5	41 52.1	4 5.4	12 45.3	52 38.0	23 16.8
k）規則を守って公正にゲームができる	31 42.5	38 52.1	4 5.5	67 49.0	60 43.8	10 7.3
l）自己中心的な行動をしないで仲よく協力してゲームができる	29 39.7	40 54.8	4 5.5	71 51.8	51 37.2	15 11.0
m）ゲーム場所の整備，用具の準備や後始末ができる	37 50.7	32 43.8	4 5.5	111 81.0	22 16.1	4 2.9
n）勝敗に対し正しい態度がとれる	32 43.8	34 46.6	7 9.0	56 40.9	61 44.5	20 14.6
o）場所や用具の安全性に気をつけると共にプレー中にも乱暴な行為をしない	29 39.7	36 49.3	8 11.0	62 45.3	64 46.7	11 8.0
p）審判,得点係,ラインズマンなどの役割や係を分担できる	28 38.4	34 46.6	11 15.0	73 26.5	66 44.9	8 5.4
q）味方の失敗を許し合い，励まし合ってゲームできる	26 35.1	39 52.7	9 12.2	45 32.8	67 48.9	25 18.2
r）ゲームの開始，終了には整列してあいさつができ，審判員の判定に従ってゲームできる	36 52.2	33 47.8	0 0	104 75.9	31 22.6	2 1.5
s）チーム内における攻撃と防御の役割を分担し，役割に応じた技能を習得してその責任を果たしながら協力して練習やゲームができる	11 15.0	39 53.4	23 31.5	19 14.8	56 43.8	53 41.4
t）集団技能を生かしたゲームの観点からチームの課題を設定し勝敗の原因を考え，計画的に練習できる．	7 9.6	38 52.0	28 38.4	14 10.6	39 29.6	79 59.8

（数字は左側人数，右側％を示す）

運動内容・態度内容は表5に示した通りである．

教員については，運動内容の個人技能に属する項a)～f)においては児童の変容をとらえやすい傾向が見られる．c)とf)に見られる対人技能についてはとらえずらい回答も見られる．集団技能g)～i)については変容をとらえずらいと回答している者が多くなっている．態度内容の個人的態度に属するk)～r)項においては児童の変容をとらえやすい傾向が見えるが，集団の中での態度s)，t)については変容をとらえずらいと回答している．ボール運動におけるゲーム指導は指導しやすいですかとの問に対して積極的にしやすいと回答が得られなかった結果からも，前述した集団全体の成果をどう反映させるに困ることがあるとの回答が多いことと，集団技能，集団の中での態度において変容をとらえずらいとしていることからもゲーム中の行動においての評価は難しいと感じている者が多いと考えられる．

学生については，評価しやすいとの回答が得られたのはm)，r)，a)，p)が上位を占めており，t)，i)，g)，s)の項目が評価しにくいと回答している．ボール運動におけるゲーム指導は指導しやすいと回答している者が25.9％もいたことを考えると指導のしやすさが評価のしやすさには結びついていないものと考えられる．評価「しやすい」と答えた項目はほとんど個人的態度の項目に多く見られており，前述した目標の集団行動での態度は評価しやすいと思っている学生が多いことからも細分化された内容においても一致している．また，「しずらい」と答えた項目は集団の中での態度と集団技能であるといえる．児童の変容をとらえる時，内容から見ると，個人的態度，個人技能，集団技能，集団の中での態度の順になると考えられる．

Ⅳ まとめ

体育科教育の授業におけるレポート分析から，学生は授業によって意識が抽象的から具体的に，学生の見方から指導者的発想へ，受動から能動へと変容する過程を見い出し，本学紀要第15集へ報告した．今回はその結果をふまえ学生を現職教諭と比較することにより一層明確に実態を把握しようとするものである．ゲーム（ボール遊び，ボール運動）における児童の変容のとらえ方について，評価を中心に調査・分析したもので，まとめると次のようである．

体育やボール運動は他教科，他内容に比較して指導しやすいと考える者が多いが，学生は技術指導特に技能や知識が伴わないと思われる内容に，より不安傾向を示した．

教科目標の中では，運動技能，集団行動での態度，練習方法・ルールの理解などを重視して評価すべきと考えている．これはゲームの中での運動技能をどのように考慮するかとの問題を含むものと思われる．また学生が集団行動での態度に強い関心を寄せているのに対し教員特に女子教員は運動技能に関心が向けられている．

学習指導過程での評価については，個人的態度の発育段階の項目において教員は授業中の観察において考慮すると答えているのに対し，学生は何らかの方法で考慮すると答え，授業中の観察ではできにくいとの考え方をしている．また技術的なねらいの項目やグループの成績についても相違が見られた．集団の中での個人に対することでは，教員，学生共に同様な傾向を示しているが，集団の中での個人技能では，教員は評価上困ることが少ないと答えているのに対し，学生は困るのではないかと考えている点が異なる．

学習者の変化過程については，教員は児童が最終的に向上していることがはっきり解るタイプを評価しやすいとしているのに対し，学生は上昇，下降を問わず変化が解りやすいタイプをあげている．

運動内容，態度内容における変容のとらえ

やすさに関しては教員，学生ともに個人的には技術，態度ともとらえやすいが，集団の中での一つの歯車としての個人をとらえるには困っていると考えられる．教員と学生の相違は，教員が技能面で，学生が態度面でよりとらえやすいと回答していることである．

本調査において教員学生共に，ゲームにおける個人の変容をとらえる時，個人的なものについては評価しやすいが，集団の中で個人の果している貢献度は評価しずらいとの傾向が見られた．このことは評価の観点が個人的なものに関しての資料は整備されているが，集団の中での個人をとらえる場面においての評価の観点についての資料が少ないのではないかと思われる．また実践の場にいる教員と理論だけの学生の間には微妙な差が見られ，学生に対してより実践を踏まえた指導が必要であると感じた．今回は評価の観点についてのアンケート調査であったが，今後の課題としては，授業分析，面談等の手段を用いて，集団の中で果される個人の貢献度をより客観的に見れる観点の作成と，それらの観点を学生のうちに提示し対応できる力をカリキュラムに組み入れる必要性を痛感させられた．

稿を終るにあたり，忙しい中を調査に協力していただいた諸先生方，学生諸君に感謝の意を表します．

（執筆分担　深町明夫　Ⅱ，Ⅲ－1，4，Ⅳ
中林忠輔　Ⅰ，Ⅲ－2，3，5）

参考文献

1　文部省：小学校指導書　体育編　1978
2　水野忠文他：体育教育の原理　東京大学出版会　1976
3　前川峯雄他：体育科教育法　杏林書院1975
4　関　四郎他：体育授業シリーズ　球技指導ハンドブック　大修館　1974
5　東京都教育庁体育部：体育指導上の諸問題　1968
6　黒木一美：小学校のボール運動　泰流社　1976
7　高田典衛：体育授業研究　明治図書1980
8　中林久二：小学校体育指導の研究とその実践　葵書房　1973
9　深町明夫・中林忠輔：文教大学における体育科教育の授業に関する研究　文教大学紀要第15集　1981
10　立岡　弘：ゲームの評価と学習の評価，体育科教育，大修館，1976
11　大内勝夫：体育評価のチェックポイント，体育科教育，大修館
12　佐藤　　：記録変化過程からみた学習曲線のタイプ，体育科教育，大修館
13　東京都教育庁体育部：体育指導上の諸問題，1968